

令和元年度
茨城大学
地域研究・地域連携
プロジェクト
活動報告書



茨城大学
Ibaraki University

令和元年度『地域研究・地域連携プロジェクト 報告書』の刊行にあたって

茨城大学では、地域の自治体、企業、プロスポーツチーム等と包括連携協定を結び、地域の活性化や産学連携、協働により課題解決に取り組むということを行っています。自治体や地域等と大学の研究者がともに取り組む事業を支援する制度として「戦略的地域連携プロジェクト」も続けていますが、それとはちがう角度から地域活性化に取り組む活動を支援するのが本「地域研究・地域連携プロジェクト」です。

令和元年度（2019年度）は学内で公募し、本報告書に収めた3件のプロジェクトが選ばれ、実施されました。それぞれの内容や成果について、各報告をご覧くださいと思います。包括連携協定に基づく事業が今後も継続して展開できるよう、本制度なども含めたバックアップの仕組みを今後も検討していきたいと思います。

茨城大学社会連携センターセンター長 西野 由希子

令和元年度茨城大学地域研究・地域連携プロジェクト 活動報告書

No	事業責任者			プロジェクト名	頁
	自治体等	茨城大学			
	連携先	所属・職名	氏名		
1	鹿嶋市政策秘書課	人文社会科学部 教授	馬渡 剛	市民共創教育研究センター・提携自治体共催シンポジウムの実施	3
2	株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック	人文社会科学部 教授	高橋 修	連携協定イベント「オール茨城大学招待デー」の強化と実施	4～7
3	株式会社 鹿島アントラーズFC	人文社会科学部 教授	澁谷 浩一	地域に根ざしたプロスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で展望する： 鹿島アントラーズの人文社会科学部地域史シンポジウム「スポーツの世界史ー茨城からアジア、世界へー」への参加、社会連携センターとのシンポジウム共同開催	8～11

市民共創教育研究センター・提携自治体共催シンポジウムの実施

〔事業責任者〕

(自治体等側)

鹿嶋市政策秘書課 課長補佐 **茂垣 諭**
(大学側)

茨城大学人文社会科学部 教授 **馬渡 剛**

連携先

鹿嶋市政策秘書課

常総市市民と共に考える課 など

10月30日鹿嶋市にて研究会, 1月22日
常総市にて研究会, 2月20日シンポジウム
「地域コミュニティの課題と展望」

プロジェクト参加者

茂垣 諭 (鹿嶋市, 市役所庁内調整・企画運営)

富山 和弘 (常総市, 市役所庁内調整・企画運営)

馬渡 剛 (茨城大学人文社会科学部, 学内調整・企画運営)

② プロジェクトの達成状況

研究会には50名程度の市職員及び学生が参加した。また常総市では市長も参加し、研究会の成果を市政に盛り込んでいくことを確認できた。

③ 今後の計画と課題

来年度は、若年層の市政への参画を仮テーマに進めていく予定である。なおコロナウイルスの影響で2月のシンポジウムは想定を大きく下回る15名の参加に終わってしまった。

プロジェクトの実施概要

① プロジェクトの目的

市民共創教育研究センターでは、毎年、提携する自治体とともに特定のテーマを設定し研究会と、その報告会となるシンポジウムを実施しているところである。本年度は、協働をテーマに実施する。

② 連携の方法及び具体的な活動計画

共通テーマをもとに、年数回の研究会と成果取りまとめのシンポジウムを年度末に実施する。

③ 期待される成果

研究会は、本学部だけにとどまらず各自治体にて学生・職員を交えて実施する予定であり、大きな教育効果が期待できる。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

連携協定イベント「オール茨城大学招待デー」の強化と実施

(自治体等側)

株式会社フットボールクラブ

水戸ホーリーホック

代表取締役社長

沼田 邦郎

(大学側)

人文社会科学部 教授

高橋 修

連携先

株式会社フットボールクラブ

水戸ホーリーホック

プロジェクト参加者

高橋 修 (茨城大学人文社会科学部・教授
担当：企画立案・全体総括)

百武 慶文 (茨城大学理工学研究科理学野・
准教授 担当：事業担当責任
者・企画立案・全体総括)

藤縄 明彦 (茨城大学理工学研究科理学野・
教授 担当：企画立案・実施)

伊藤 孝 (茨城大学教育学部・教授 担当：
企画立案・実施)

沼田 邦郎 (株式会社フットボールクラブ水
戸ホーリーホック・代表取締役
社長 担当：事業担当責任者・
企画立案・調整・総括)

市原 侑祐 (株式会社フットボールクラブ水
戸ホーリーホック・経営企画
室・室長補佐 担当：企画立案・
調整)

加藤 健一 (株式会社フットボールクラブ水
戸ホーリーホック・事業チー
ム・広報担当 担当：企画立案・
調整)

古源 慶太 (株式会社フットボールクラブ水
戸ホーリーホック・事業チー
ム・広報担当 担当：企画立案・
調整)

プロジェクトの実施概要

① プロジェクトの目的

茨城大学と株式会社フットボールクラブ水戸ホーリーホック（水戸ホーリーホック）は平成25年に連携協力に関する協定を結んでおり、地域に密着したイベントを共同で実施してきた。水戸ホーリーホックは地域密着度の高いクラブであり、クラブの地域における活動を支援することは、茨城大学が掲げる地域に貢献する人材育成の観点からも重要なものであると考える。

また、茨城大学と水戸ホーリーホックが連携協定を結んでから7年ほど経つが、この間に多くの教職員と学生が連携協定事業を通して有機的に結びつきを深めてきた。このプロジェクトのもう一つの側面は、水戸ホーリーホックをキーワードにした学内組織の横糸として、教職員・学生・OBOGの「ネットワーク」を強化し、各学部が実施する縦糸の地域連携集団とは異なるネットワークを構築することにある。このような横糸の活動によって、学内における相互理解を深め、お互いの専門性を活かした地域連携活動を行う土壌を形成できると考える。

② 連携の方法及び具体的な活動計画

今年度の事業としては、6月22日（土）に

ケーズデンキスタジアム水戸で開催されるサッカーJ2 第19節の試合を学生および教職員で観戦するイベント「オール茨城大学招待デー（以下招待デー）」を計画した。このイベントはクラブに観戦チケットを無償で提供してもらうことで実現しており、茨城大学の事業負担としては参加者の大学からスタジアムまでの送迎をサポートする部分である。招待デーは今回で7回目となる連携事業の中心イベントであり、今年度はスタジアムでの教育イベントを付加することで、学生に地域に密着するクラブの活動内容について体感してもらいたいと考えている。特に、クラブの運営、広報などの情報をクラブから学生に提供してもらい、学生のインターンシップやiOPへの意識づけを行いたい。また、茨大OBのインターンシップ体験談や、ホーリーホック選手によるキャリア形成についての講話も企画したいと考えている。

オール茨城大学招待デーの内容、特に教育イベントの内容については、参加した学生からアンケートをとるなどして、今後の連携協定事業へつなげるようにしたい。また、招待デーや教育イベントの様子については、後日ビラを作成・配布して参加しなかった学生や来年度の新入生にも周知するなどし、事業の成果報告を行う。

③ 期待される成果

短期的な成果としては、学内での広報活動および招待デーイベント参加を通して、水戸市に水戸ホーリーホックというサッカーのクラブチームがあることを知ってもらうことである。特に、地域の住民が一体となって応援する様子に触れることで、学生および教職員の地域貢献の意欲を高める効果が期待される。

長期的な成果としては、サッカーを通じた学内外での「ネットワーク」づくりである。大学では学部や部署が異なれば交流する機会がほとんどなくなるが、サッカーというスポーツを共通項として持ち出すことにより、学

部や部署の枠組みを超えた人材交流が可能となる。7年間の活動によって、このネットワークはある程度構築されているが、このイベントを継続実施することで、より多くの学生や教職員が参画し、交流が盛んになることを期待している。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

2019年6月22日（土）に「オール茨城大学招待デー」を実施した。これは、サッカーJ2リーグの水戸ホーリーホックと横浜FCの対戦（18時キックオフ）を、水戸市小吹町にあるケーズデンキスタジアムで観戦する、というイベントである。イベント実施に当たって、水戸ホーリーホックの加藤氏、市原氏、古源氏、茨城大学教員の高橋、藤縄、伊藤、百武で4回ほど事前打ち合わせを行い、活動の広報と詳細を議論した。

広報活動としては、6月上旬より6月21日まで、「パネル展示2019」を図書館1Fロビーで実施した。パネルの設営についてはケーズデンキスタジアムで場内放送を担当しているアナウンスステーションの学生が積極的に手伝ってくれた（図1）。準備中には他のイベントで図書館を利用していた一般の方々からも声をかけられるなど、学内外での周知活動となった。



図1 パネル展示の様子

6月17日から21日までは、お昼休みの時間帯に水戸キャンパス生協前で、招待デーのチラシとチケット配布を行った(図2)。水戸ホーリーホックのマスコットキャラクターであるホーリーくんも参加して、広報活動を盛り上げてくれた。チームの成績が絶好調であったこともあって、多くの学生・教職員がチケットを受け取っていった。(258枚配布)この広報活動についても職員やアナウンスステーションの学生が手伝ってくれた。



図3 芝生席で記念撮影

連携記念 オール茨城大学 招待デー
 茨大生はもうらん、卒業生、教職員、ご家族、お友達も全員OK!
明治安田生命 サッカーJ2リーグ
2019.6.22(土) 18:00 キックオフ 於 ケーズデンキスタジアム水戸
水戸ホーリーホック vs 横浜FC
 の**無料招待券**(ホーム自由席)を配布しています。

無料招待券は、人文高機構研究室(C303)、理療機明彦研究室(Q211)、教育伊藤孝(A301)、理百武慶文研究室(E406)、社会連携センター1F受付窓口、図書館2F受付カウンター、大学生協サービスショップで配布中! 6月17~21日の昼休み時間中には、生協前ブースでも配布の予定です。

試合当日の予定

茨大からスタジアムまでバスで一緒に移動の方!

15:00 集合(大学本部前) → 15:10 茨大正門前出発 → 15:40 スタジアム到着
 → 入場して席を確保(※「ホーム自由席」に入場しひかひかを要約) → 16:10 選手バスを出発

① **芝生席で熱く応援** 球場に並び、芝生席へ、茨大ホーリーネットの応援のもと、声援で選手を応援しよう!
 ② **座席でじっくり観戦** 球場に並び、座席へ、ゆったり、じっくりサッカー観戦!

ここから試合終了まで球全員で

16:30 記念撮影 ※ホーム茨城大生協に全員集合!(雨天時は中止の場合あり)
16:45 教育イベント クラブスタッフによるインターンシップなどの紹介、※による体験談などを予定
17:30 ウェルカムフラッグ陣に参加し、試合前のピッチへ!
 ※試合前のピッチ上で、入場する選手を茨大生が迎えます! ホーム側(ランゾーニ)-全員集合!
 席の中わらわらい観を聞いてきてください。再入場にはチケットの半券が必要なので、必ず携行してください。
18:00 キックオフ-19:55 試合終了 ※勝利の場合、ライندگانあり。
20:20 スタジアム発-20:50 頃大学帰着・解散
 ※ 帰路は「ホーム自由席」であればどこでもOKです。ただし記念撮影ウェルカムフラッグ陣には全員参加してください。
 ※ 「ホーム自由席」には座席がありません。雨天の場合、各自レインコート等を用意してください。なお雨天の際は観戦は中止されています。

図2 招待デーチラシ

招待デー当日は午後3時に水戸キャンパスよりバスで小吹町のケーズデンキスタジアムへ出発した。バス利用者は43名で、大半は学部学生が利用した。スタジアムでは教員とクラブスタッフで参加者を誘導した。まずは座席を確保して記念撮影を行った(図3)。

記念撮影後は教育イベントを実施した。今回は水戸ホーリーホックの地域貢献活動およびインターンシップ状況について、市原氏から説明を受けた(図4)。サッカーの試合を開催するにあたって、裏ではどのような活動がなされているかを具体的に話してもらい、スポーツイベントに携わる仕事の詳細を分かりやすく説明してもらった。



図4 水戸ホーリーホックの活動説明

続いて茨大OBの白石達希君とOGの小林かなさんから、具体的なインターンシップ活動の報告があった。参加した学生は質疑応答の際にインターンシップについて熱心に質問をしており、アンケートでもインターンシップを早い段階でしっかりと考えたいと書いた学生もいることから、意識づけの動機として十分な成果があったと考えている。最後に浜崎拓磨選手と近藤慎吾選手がサプライズで登場

し、参加者と一緒に記念撮影を行った(図5)。



図5 教育イベント記念撮影

教育イベント後は、試合開始前にピッチに入り選手を迎える「ウェルカムフラッグ隊」として参加した。その後は試合をじっくりと観戦し、バスで大学までの帰路についた。なお、今回は招待デー初のナイター観戦であった(図6)。



図6 ナイター観戦

帰路のバス中でアンケートを実施したが、参加者全員が満足しており、今後のインターンシップに役立つとの回答が多く見られた。また、サッカーの試合そのものについても大いに興味を持ち、また参加したいとの回答が多かった。

② プロジェクトの達成状況

今回のプロジェクトを通して、ホーリーホックを身近に感じてもらい、またインターンシップの選択肢としても興味を持つ学生がいたと思う。その点では短期的な成果は着実にあがったと考えられる。

長期的な部分では、今回参加した学生が今後もこのような地域活動に関するイベントに参加するかが指標となるが、それは来年度にアンケートをとるなどして測りたい。少なくとも多くの教職員が率先してことイベントを盛り上げてくれたことは確実であり、大学内の横糸としてのネットワークづくりは強化されたと思う。

今回の活動内容についてはチラシを作成しており、生協のテーブルにA5パネルを置くなどして学内で活動報告を実施する。

③ 今後の計画と課題

今後の計画としては、ホーリーホックとのインターンシップをどのように強化するかが挙げられる。ホーリーホックは地域の企業と数多くスポンサー契約を結んでおり、地域の企業が抱える課題などもよく理解していると思われる。ここに茨城大学の学生が関わることで、地域の課題をあぶりだし解決する機運を高めるような流れを茨城大学で模索できればと思案している。

地域に根ざしたプロスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で展望する：鹿島アントラーズの人文社会科学部地域史シンポジウム「スポーツの世界史—茨城からアジア，世界へ—」への参加，社会連携センターとのシンポジウム共同開催

〔事業責任者〕

(自治体等側) 株式会社鹿島アントラーズ・エフ・シー 代表取締役社長

小泉 文明

(大学側) 人文社会科学部・教授

澁谷 浩一

連携先

株式会社 鹿島アントラーズ FC

プロジェクト参加者

鈴木 秀樹 (株式会社鹿島アントラーズ FC

取締役 マーケティングダイレクター)

佐藤 沙希 (株式会社鹿島アントラーズ FC

マーケティンググループ セールsteam)

澁谷 浩一 (人文社会科学部・教授，地域史シンポジウムの企画・運営統括担当)

山田 桂子 (人文社会科学部・教授，地域史シンポジウム企画・運営担当)

中田 潤 (人文社会科学部・教授，地域シンポジウム運営，シンポジウムコーディネーター担当)

森下 嘉之 (人文社会科学部・准教授，地域シンポジウム運営，シンポジウム司会担当)

加藤 敏弘 (人文社会科学部・教授，鹿島アントラーズとの連携調整担当)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

例年人文社会科学部が主催している地域史

シンポジウムを，今年度は「スポーツの世界史—茨城からアジア，世界へ—」というタイトルで社会連携センターと共同開催し，鹿島アントラーズのゲストスピーカーに参加してもらい，地域に根ざしたスポーツの存在意義と今後のあり方について世界史的視野で考え，今後の連携関係を視野に入れながら展望する。

②連携の方法及び具体的な活動計画

2月の地域史シンポジウム開催が活動の中心になる。人文社会科学部のプロジェクト参加メンバーがシンポジウムの内容・構成について検討を行い，鹿島アントラーズ側とも調整を行いながら詰めてゆく。

③期待される成果

プロスポーツチームと大学の連携事業は，当然のことながら通常は地域活性化の視点から論じられる。本プロジェクトでは，これを，歴史をさかのぼり，視野を茨城からアジア，さらには世界に広げて振り返ることで，地域におけるスポーツが果たす役割について新たな展望を見出す契機となることが期待される。

プロジェクトの実施成果

① 活動実績

年度の前半は、プロジェクトメンバーが会合を重ね、シンポジウムの企画・構成を立案し、講演者の選定、テーマ設定を行った。

年度後半、シンポジウムの内容・講演者を確定し、チラシ・ポスターの作成発注を行った。運営統括担当の澁谷とシンポジウムコーディネーター担当の中田、アントラーズとの連携調整担当の加藤の3名が鹿島アントラーズを訪れ（11月28日）、シンポジウムの趣旨・内容、進め方についてアントラーズ側の佐藤沙希氏（マーケティンググループ セールsteam）と打ち合わせを行った。

その後チラシ・ポスターの関係各所への送付、各種行事などでの配布という形で宣伝活動を行い、シンポジウム当日を迎えた。

2月16日のシンポジウム当日は12時からシンポジウム講演・報告者、運営担当者間で最終的な打ち合わせを行い、当日の進行、特に講演・報告者全員による総合討論の進め方についての確認を行った。



写真1：事前打ち合わせ風景

そして、13時から17時まで人文社会科学部講義棟10番教室においてシンポジウムを開催した。なお、当初は鹿島アントラーズを代表して、代表取締役社長小泉文明氏が講演予定であったが、当日急用により、同社取締

役マーケティングダイレクター鈴木秀樹氏が同じタイトルで講演を担当した。

当日のシンポジウムプログラムは以下の通りである。

・主催者挨拶：内田聡（人文社会科学部学部長）

・基調講演：スポーツ・戦争・アマチュアリズム — 岡部平太と飛田穂洲の軌跡から — 高嶋航（京都大学大学院文学研究科）



写真2：高嶋航氏基調講演風景①



写真3：高嶋航氏基調講演風景②

・特別講演：茨城からアジア・世界へ — 鹿島アントラーズFCの挑戦 — 鈴木秀樹（鹿島アントラーズ・エフ・シー マーケティングダイレクター）



写真 4：鈴木秀樹氏特別講演風景①



写真 7：金澤大樹氏研究風景風景



写真 5：鈴木秀樹氏特別講演風景②

・総合討論：講演・報告者全員，コーディネーター：中田潤（茨城大学人文社会科学部）



写真 8：総合討論風景①

・研究報告：スポーツの魅惑 —メディアが映し出したファシズム時代のイタリア—
新谷崇（茨城大学教育学部）



写真 6：新谷崇氏研究報告風景

・閉会挨拶：藤原貞朗（五浦美術文化研究所所長）

② プロジェクトの達成状況

シンポジウム当日はあいにくの悪天候の中約 100 名の参加者に集まっていた。水戸や茨城にゆかりのある戦前から戦後にかけて活躍した二人のアマチュアスポーツの指導者の軌跡を追った高嶋氏の基調講演やファシズム時代イタリアにおけるスポーツの実像に迫った新谷氏の研究報告，そして戦前から戦後にかけて活躍した日本の体育指導者に光を当てた金澤氏の研究報告など，戦争・ファシ

・研究報告：体育指導者と戦争—大谷武一の場合— 金澤大樹（茨城大学大学院人文社会科学研究科大学院生）

ズムの時代におけるスポーツの様相を取り上げた講演・報告の中で、鈴木秀樹氏による特別講演では、これまでのアントラーズの歩みを踏まえ、メルカリへの経営権譲渡という選択を取って行ったアントラーズの地域貢献へのビジョンが力強く語られた。



写真9：総合討論時会場風景

すべての登壇者にコーディネーター中田が加わった総合討論では、事前に回収した質問用紙にとどまらずフロアからも複数の発言がなされ盛り上がりを見せた。1930年代のヨーロッパ社会やスポーツと国家の関係に関するアカデミックなやり取りがなされた一方、プロスポーツの地域社会との共存の在り方、アマチュアとプロとの線引き・境界等をめぐって活発な議論がなされた。長い歴史的スパン、世界史的な視野の中でスポーツと地域の今後を展望するという本プロジェクトの当初の目的は一定程度達成されたと考える。

③ 今後の計画と課題

人文社会科学部主催の地域史シンポジウムは毎年時代とテーマを変えながら継続しており、来年度は近世日本史に関するテーマを取り上げる予定となっている。そのため、本プロジェクトの成果が来年以降に直接的に受け継がれるわけではない。しかしながら、本プロジェクトにおいて、近視眼的ではない形でスポーツの存在意義・役割について思考を深

めたことは今後の本学とアントラーズの連携事業の形を展望するうえで大きな意味を持つのではないかと考える。新たな連携の形を模索してゆくことが今後の課題となるだろう。



図：地域史シンポジウムチラシ・ポスター



問合せ先

国立大学法人茨城大学 社会連携センター

(研究・社会連携部社会連携課)

〒310-8512 茨城県水戸市文京 2-1-1

TEL : 029-228-8088

FAX : 029-228-8495

E-mail : renkei@ml.ibaraki.ac.jp

HP : <https://www.scc.ibaraki.ac.jp>